

こんにちはコミュニティ Community



栃木県誕生150年
みんなで創る、未来のとき

CONTENTS

- 02 コミュニティカレッジ
- 06 まちあるき研修会
- 08 書籍紹介
- 09 いきいきコミュニティライフ！
- 10 地域研修会
- 11 コミュニティ通信
- 12 お知らせ

Vol.
121
March
2023

photo：まちあるき研修会（宇都宮市白沢宿）

特集 コミュニティカレッジ 2022 (コミュニティリーダー養成講座)

栃木県内では地域特性に応じた地域づくりの実践が丁寧に積み重ねられています。
今回は美しい田園風景を維持する芳賀町と新興住宅地がある宇都宮市瑞穂野地区から学びました。



直井氏

中上川氏



講師：平野 哲也氏（常磐大学教授 リモート参加）
芳賀町生涯学習課
スポーツ振興係長 中上川了氏
芳賀町総合情報館 直井祐紀枝氏（学芸員）
芳賀町の伝統的な行事や暮らし方の中に次世代に継承すべき地域づくりの知恵が埋め込まれています。芳賀町の地域づくりの特性を地元の歴史から学びました。

第1回カレッジ◆11月18日（金） 歴史に学ぶ「芳賀町の地域づくり」

栃木県コミュニティ協会では、地域の「コミュニティリーダー」の養成を図るため、「コミュニティカレッジ」を開催しています。
今年度は、令和4年11月18日（金）から12月23日（金）まで全4回の日程で一般社団法人とちぎ市民協働研究会の代表理事である廣瀬隆人氏をコーディネーターとして開催しました。



リモート参加の平野教授

◆芳賀町町民大運動会
町民の一体感を醸成するシンボリック事業として継続的に行われている芳賀町町民大運動会は、こどもから高齢者まで多世代が集まり交流が生まれる場です。
昭和30年から67年間継続している、町内13の自治会から年代を超えておよそ千人が集まる事業です。町民の健康増進はもとより、同じ場所でお弁当を食べ、スポーツをし、交流することで新たなつながりが育まれます。運動会に参加していない人へも声をかけ、運動会を知ってもらうことが大切であると中上川氏は言います。
こどもの運動会への参加がきっかけで、親も参加するようになることもあるそうです。コロナでここ3年は開催できませんでしたが、令和5年はぜひ開催したいと意気込んでいます。

◆芳賀町の地主継承のお話
平野教授に芳賀町の近代史を伺いました。特徴として挙げられたのは、岡田家、綱川家などの地主が近代まで継承されていることです。村のまとまりが良く、組織的に動くことができ、力が小さな者でも、協働することで大きな力が発揮できることに尽力していたそうです。村の利益を追求することは自分たちのためという関係を作っており、村単位の組織が近代まで継承されています。みんなでさまざまなことに時間をかけて話し合い、同意をとっていくこととまとまりが保たれたのではないかとのお話でした。

◆「芳賀町の地域づくり」とは？
町民は、これまで丁寧に継承してきた事業や仕組みを維持し、大切に次世代に継承してきました。そのおかげで、お囃子や太々神楽が健在で、地域の一体感のシンボルになっています。新たに開発された住宅団地の住民の地域づくり参加にも一役買っています。
廣瀬氏は、町に工業団地やバイパスが整備されても、周辺農地の市街化が抑制され、田園風景が広がっていることに触れ、農業を基盤とした伝統的な地域づくりの姿勢がそこにも現れているのではないかと話されました。



お囃子保存会のみなさん



第2回カレッジ ◆ 11月25日(金) 人の心をつなぐ「お囃子フォーラム」

地元のお囃子などが地域の一体感のシンボルであると考える廣瀬氏。芳賀町のお囃子会や太々神楽保存会がどのように活動をしているかお話を伺いました。

○パネリスト

八ツ木お囃子会 黒須 章一氏、綱川 文世氏
代町御囃子保存会 黒崎 晋一氏
内町お囃子会 小林 雅彦氏
太々神楽保存会・西水沼お囃子会

手塚 孝幸氏・中上川 了氏
芳賀町立芳賀東小学校 教務主任 高久 誠氏
コメンテーターに芳賀町総合情報館学芸員の直井氏を迎えてのフォーラムとなりました。

◆お囃子の重要性とは？

みんな、こどもの頃からお祭りが大好きです。夜、出かけられることで大人の仲間入りができるような感じがしてうれしかったと小林氏は言います。

代町御囃子保存会の会員は49名(大人37名、こども12名)で、11名は元々代町に住んでいた方で、半分以上が新しく転入された方です。家を建てたが周りに知り合いがない方に、元々住んでいた方とつながりを持つきっかけになればとお囃子会を紹介しています。活動していくうちに地域に少しずつ溶け込んでいくそうです。

また、お囃子はこどもが中学生くらいになると一度辞める場合が多いですが、参加していたお囃子で築かれた関係性はなくなり、大人になっても週末だけ地元に戻ってくる方も多いそうです。

廣瀬氏の「活動に負担はありませんか？」という質問に対して黒崎氏は「ありません」と言い、小林氏は「負担感より楽しさが上回る」と言います。

八ツ木お囃子会、太々神楽保存会・西水沼お囃子会の皆さんも自分たちのお囃子を誇りに思い活動しています。芳賀町内では神楽の担い手、山車の担ぎ手の年代層が若く、小学校から中学校まで切れ目なく郷土芸能(お囃子や太鼓など)が継承されています。

お囃子会は自治会の縁日、夏祭りなどのイベントに積極的に手伝いに行ったり、参加したりするようにしているそうです。大事なこととして、大先輩の活動を若手が大切に、手伝いを続け、先輩も活動などについて自然体で丁寧に説明します。そうしたことで、自然な形で地域づくりの担い手が育成されています。

◆高久先生の活動について

高久先生は芳賀町になくてはならない存在と廣瀬氏をはじめお囃子会の皆さんは言います。

高久先生の活動のきっかけは地元の方からお囃子の後継者が少なくなってきたと相談をされたことで、自分の得意とする柔道とお囃子を通して人づくりをしようと考えました。夏休みの柔道部の部活動で保護者からの要望もあり、午前中は柔道の練習、午後は宿題を教え勉強をし、最後の1時間をお囃子の練習にあてました。

お祭りで演奏すると、こどもたちは地域ではスターのよう人気者で、地元の人たちにも感謝され、ウインウインの関係ができました。高久先生自身も教員をしながら東京へ通い、雅楽を習得されたそうです。地域のためにプライベートの時間を割いていますが、何より先生自身が活動を楽しんでいるそうです。

廣瀬氏から「仕事以外の活動で大変だとか負担感はないのですか？」という質問に、「ありません。楽しいからです。」と高久先生は答えました。芳賀町にはお囃子を通して大人がこどもたちに楽しい姿を見せられる環境があります。

「芳賀町の皆さんはコミュニティの中で社会的な学びを作り、吸収するのが上手な方々だと思います。」と高久先生は言いました。

第3回カレッジ◆12月9日(金) 瑞穂野地区の地域特性と まちづくり協議会

まちづくり協議会

○ゲスト講師

瑞穂野地区まちづくり協議会

瑞穂野地区連合自治会 会長 坂本 保夫氏

瑞穂野地区社会福祉協議会

会長 鈴木 治氏

瑞穂野地区福祉のまちづくり推進委員会

委員長 金敷 恭之氏

宇都宮市社会福祉協議会

地域福祉課長 富井 浩枝氏

瑞穂野地区での第1回目の講座は瑞穂野地区の歴史やまちづくり活動、計画策定のきっかけなどを伺いました。

瑞穂野地区まちづくり協議会の主要事業は次のとおりです。

- ① みずほのフェスティバル
- ② 福祉のまちづくりの推進
- ③ 「特定非営利活動法人みずほ」の設立
- ④ 地域内交通の運営
- ⑤ 防災計画の策定
- ⑥ 防犯ネットワーク
- ⑦ 各団体の自主事業



特徴は構成団体に地区内の小中学校とそのPTAが入っていることです。

◆瑞穂野地区の福祉のまちづくり計画(※)策定の経過は？

※住民自らが地域の生活・福祉課題を把握し、その解決のために取り組むべきことをまとめて策定する計画のこと

きっかけは、富井氏が担当者として瑞穂野地区へ足を運び、まちづくり協議会の方々へ計画の策定をお願いしたことでした。

「瑞穂野の人たちは、まじめで温厚ですが、やるべきことがある時はしっかり結束してやるという特性があります。」と坂本氏。地区内の多様な団体に参加を呼びかけ、48 団体の協力を得て、策定準備委員会・策定委員会を重ね、福祉のまちづくり計画を策定しました。策定にあたっては、各団体が参加しやすい形でアンケートグループ・座談会グループ・マップグループの3つのグループに分かれ、作業を進めました。



金敷氏 鈴木氏 坂本氏



富井氏 廣瀬氏

住民の皆さまからいただいた意見をグループごとにまとめ、地域の課題を明らかにし、自分たちができることや地域に必要な取組について話し合いを重ねました。

◆瑞穂野地区はどんな地域ですか？

昔から鬼怒川の恵みを受けた肥沃な土地で農業を営み、お米の貸し借りをしあうような関係がありました。昭和29年に村は市へ合併。昭和40年代後半に新興住宅が800戸でき、人口が急増し、自治会としてまとまるのに年数を要しました。平成になると、緑の郷の住宅地500戸ができましたが、こちらの場合は開発業者と話し合いを持ち、自治会加入が販売条件となりました。

当初は戸惑いがあつた住民同士も、体育祭や敬老会などさまざまなイベントに一緒に取り組むことを通して一体となってきたと坂本氏は言います。

◆瑞穂野地区が新しく住み始めた住民と一体感をつくったコツは？

金敷氏は、農村だったところへ住宅団地ができたので、最初は驚いたそうですが、一緒にいる時間、経験の蓄積が、一体感につながったのだと思うと言いました。



福祉のまちづくり計画

地域の一人暮らしのお年寄りや様々な事情を抱えた方の活動への参加についても配慮が必要です。誰にでも平等に割り振るのではなく、イベントも10回のうち1回でも来てくれれば良いと考えなければならぬと坂本会長。廣瀬先生も「地域づくり、PTA活動など、みんなが平等にというのは社会的排除を生むのではないか。行事に出ないのに権利だけ行使するなど責めることは、社会的排除につながる。平等ではなく公正に。これがまちづくりの本質なのではないか。」とおっしゃいます。

◆これからどうしていききたいですか？

坂本会長は、「福祉のまちづくり計画を作り、5年が経過しました。見直し時期であり、改訂版を作ろうと考えています。」と話され、富井課長も、「みんなと一緒に汗をかいて作っていききたいです。」とコメントされました。



ゲスト講師6名

第4回カレッジ ◆12月23日(金) 福祉計画づくりの 3つの柱とプロセスを学ぶ

○ゲスト講師

瑞穂野地区まちづくり協議会

瑞穂野地区連合自治会 会長 坂本 保夫氏

瑞穂野地区社会福祉協議会 会長 鈴木 治氏

瑞穂野地区福祉のまちづくり推進委員会

委員長 金敷 恭之氏

地域づくり部会長

杉田 義昭氏

基盤づくり部会長

岩下 義行氏

人づくり部会長

増淵 進氏

宇都宮市社会福祉協議会

地域福祉課長

富井 浩枝氏

第2回目は、福祉のまちづくり計画の具体的な内容や策定経過について伺いました。

瑞穂野地区の計画づくりは、市内南部ブロック8地区のモデル地区として、先行して実施されました。

◆アンケートグループについて

住民アンケートの内容から検討を重ねました。

アンケートを自治会から各世帯に配布し、回収率は51.4%に達しました。アンケート調査の結果から次の3点が分かりました。

- (1) 地域コミュニティの重要性
- (2) 自助や互助の取組の充実
- (3) 緊急時等における見守り体制づくり

◆座談会グループについて

住民座談会を開き、地域の皆さん80名に集まっていた。地域のよいところや問題・課題について話し合いました。

また、次世代育成へつなげるため、瑞穂野中学校の生徒にも参加してもらいました。中学生からは、「住民の皆さんが本場に瑞穂野地区のことを思っていることがよく分かった」などの感想が寄せられました。

◆マップグループについて

地域の公共施設やスーパーなどの社会資源を地図に表し、見える化することにより、自分たちの地域を知り、何が必要か話し合いました。

マップ作成から分かったこと・感じたこと

- (1) 地域内交通の充実・整備
 - (2) 生活に関わる社会資源の二極化
 - (3) 福祉施設や公共機関の活用
 - (4) 住民の居場所づくりの促進
- マップの作成により住み慣れた地域で安心して暮らせることのできる地域づくりを目指しています。
- ◆福祉のまちづくり計画策定プロセスと学び
- まちづくり協議会を主体としたことによって、地域住民が計画づくりを通じて、「地域」と「福祉」を学び、福祉の主体の形成(自分ごとになる)につながりました。それは、教えられる学びではなく、自ら「調査することによって、「気づく」プロセスでありました。

2023.1.18(WED)

の秘訣を探る



河内地区市民センター 所長 湯沢 義久氏



地元の中学生の地域 PR パンフレット作成を契機に、地区ガイドブック作成や生涯学習センター講座による地域の魅力発信を推進している宇都宮市河内地区。まちあるきでその魅力を確認しつつ、キーパーソンたちに波及効果や今後の展望を伺いました。

まちあるき研修会は、地域資源を活用してまちづくりを行っている県内の事例を、まちあるきをしながら参加者同士の交流や意見交換を通じて学びものです。今年度は河内地区から学びました。研修会の企画運営や司会進行は委託先の特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房が行いました。



参加いただいたみなさん

河内地区まちづくり協議会の永井会長や増淵事務局長、河内地区市民センターの湯沢所長、奥州街道白澤宿の会の清水会長に河内地区の紹介や河内地区まちづくり協議会の活動の紹介をしていただいた後、まちあるきをしました。

【河内地区について】

河内地区は、江戸時代に奥州街道の宿場として白沢宿が大いに賑わいました。平成19年に市町合併で宇都宮市となりました。市内最大数の52単位自治会があり、人口は約3万5千人。小学校6校、中学校3校があり、広さは宇都宮市の9分の1を有します。産業は鬼怒川の水利に恵まれ古くから農業が盛んで、岡本工業団地の立地などで工業も盛んになりました。



河内地区まちづくり協議会
事務局長 増淵 昭氏

河内地区に住んでいる皆さんの声を参考に平成28年に「地域ビジョン」を策定しました。河内らしさを大切にし、「自然と人を大切に絆で結ぶ楽しいかわち」づくりを推進しています。

【組織の目標】

- ・地域の課題を見つけ出し、地域住民が自分たちの問題と捉え、自ら解決する
- ・行政と協働により、地域のまちづくりを推進する

【まちづくりの方向性】

- ・地域の総意を形成する
- ・地域の安全安心を守る
- ・特色あるまちづくり

7つの部会を設置し、活動しています。河川・土砂・内水の3つを1枚にしたハザードマップを作成しました。「情報誌かわち」を年に4回発行しています。地域内交通・デマンドタクシーも運行しています。

【河内地区まちづくり協議会】



令和4年度 まちあるき研修会 in 河内

みんなで調べた地域の魅力の活かし方とつなぎ方

【河内生涯学習センターについて】

宇都宮市河内地区市民センター（生涯学習センターを兼ねています。）は令和4年2月に優良公民館表彰（文部科学大臣賞）を受賞されています。この表彰は特に工夫を凝らした取組によって地域住民の学習活動に貢献し、模範となる公民館が表彰されるものであり、宇都宮市としては18年ぶりの受賞になりました。



河内地区まちづくり協議会
会長 永井 寛氏

地区の概要説明・活動報告

【河内地区ガイドブック・ガイドマップ】

コロナの影響でイベント等が実施できない代わりに、こどもたちにこれから河内を誇りに思い学んでほしいと考え、作成することになりました。

市民センターに隣接した古里中学校の生徒と行政と地域が半年かけて、アポとり、取材、編集をしてガイドブックとガイドマップを作成しました。

ガイドブックには統計・年表を掲載し、文化財・自然・農業・工業・うんまいもん・中学校区ごとの魅力スポットを紹介しています。表紙には小学生が描いた「身近な風景」が配置されています。

こどもたちに河内の文化財や歴史を理解できるように作成し、中学校・小学校で副読本として利用されています。生涯学習センターの講座として、古里中学校の生徒が河内地区の住民の皆さんに発表をしました。ガイドマップは一般の皆さんに配布しています。

白澤彫刻屋台の見学



来年度は田原地区でも田原中学校と協力してガイドブックを作成する予定です。



河内地区ガイドブック

【まちあるきの様子】

増渚事務局長の案内で「白沢宿史跡と七福神めぐり」のまちあるきを行いました。まちあるきでは、特別に彫刻屋台倉庫を開けていただき、屋台の保存や活用についてお話を伺いました。また、周遊ルートをたどりながら宿場の面影を残す史跡の説明をいただき、地域の歴史を残す活動を学びました。



まちあるきの様子



サギソウは昭和53年に河内町の花となりました。河内地区の花「サギソウ」の妖精「サキちゃん」と「ソウくん」は、河内地区のPRをしています。
全国にファンがいるそうです。



つつちー おすすめ！



◆ 書籍紹介 ◆



『伴走型支援』

新しい支援と社会のカタチ

奥田知志・原田正樹編、有斐閣発行

「伴走」という言葉に皆さんはどんなイメージを持つでしょうか。ここ数年、非営利組織支援の場面で聞く機会が増え、さらにはビジネス分野でも使われるようになってくる印象があります。その意味として、国語辞典には「走者のそばについて一緒に走る」と説明されています。組織経営の視点で理解しようとする「走る」に気持ちが向かいがちですが、本書では地域の在り方や人間の暮らし方・生き方において「そばについて一緒に」いることの意義が執筆者たちによって語られています。

本書に通底しているのは、課題解決型支援と伴走型支援は対人支援の両輪であるという考え方です。いわば問題提起とも取れますが、その背景には社会的孤立に対する強い危機感があります。後者はつながり続けることを目的とし、そのことによって困難な状況にある人たちが生きる意欲を取り戻し、結果として課題の解決にも向かうと考えられています。

具体的な場面や人の状態として、アルコール依存や8050問題、ホームレス支援について紙幅が割かれています。また、とあるひきこもり当事者に対する支援プログラムの実践が詳細に記されていますが、個別の生きづらさに徹底的に寄り添ったアプローチはまさに圧巻です。さらに、伴走型支援の具体的な手法にもつながる当事者研究の理念や展開についても述べられています。

編著者の奥田氏は「ホームレス」と「ハウスレス」は違うと言い、彼が北九州市で立ち上げた「NPO法人抱撲」は、行き場のない困窮者たちの「ホーム」を作り続けています。そして、伴走型支援の成果を「自分の物語の創造」と表現していますが、これは人間が誰しも有する根源的な欲求なのかもしれません。ともすると課題解決に奔走しがちな日々ですが、それだけをゴールとしない、人と人がつながり続けられる地域社会の実現を希求し続けたいと思います。

土崎 雄祐（つちざき ゆうすけ）秋田県生まれ。これまでにNPO職員や大学教員として学生向け地域志向科目や市民向け講座のプログラム開発、自治体職員研修の企画立案支援などに従事。（一社）とちぎ市民協働研究会専務理事、認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房常務理事。公職として、那須塩原市男女共同参画審議会会長など。

私たちもコミュニティづくりに協力しています

県民・行政・企業の協働と社会貢献活動のお手伝いをします！



NPO 法人とちぎ協働デザインリーグ
TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE

みんなと育むまちづくりシンクタンク

とちぎボランティアNPOセンター「ぽ・ぽ・ら」管理運営団体

☎ 070-4288-7400 HP: <https://www.tochigi-tcdl.net/>



連載 いきいきコミュニティライフ！ ⑦

文 / 安藤 正知

「自治会とITの活用」

昨年のコラムでも紹介した宇都宮市自治会連合会主催の「自治会活動元気アップ研修会」を今年度も開催しました。その時のテーマから「ITの活用」を取り上げてみます。ちなみに、今年度は、株式会社 GlocalDesign の酒本氏を講師にお迎えして、市内3か所で開催、自治会関係者100名以上がご参加くださいました。

DX(デジタルトランスフォーメーション)という言葉をあちこちで耳にしますが、コミュニティの世界でも話題になることが多いですね。今回の研修会においても、「自治会のデジタル化は避けて通れない課題」であり、たとえば、公式LINEアカウントを活用する、紙媒体と電子回覧板の併用を検討する、等で盛り上がりました。一方で、必要性、有用性は理解できても、何をどう始めたらいいのか見当もつかない、という意見(嘆き)も多く聞かれました。それぞれの事情もあって「じゃあ、明日から始めるか」とはならないのがデジタル化の難しいところです。会の活性化のために若い世代に参加して欲しい、そのためにも開かれ

た組織運営が重要、だからITを活用したい、でも若い人がいないとできない・・・このループをどう断ち切るか。

グループ討議では、既に活用している自治会から、高校生や大学生に講師役をお願いした、まずは役員のLINEグループから始めた、などの取り組みが紹介されましたが、こうした事例を実現するためにどのような支援が望まれるのか、研修会を実施しての課題となりました。

各回の研修会に数名の大学生が参加していただきましたが、「デジタル化は手段であり、その手段を活用して何を発信するかが大事」との意見はもっともな指摘でした。関心はあっても、自分たちとは関りが無い、あるいは関心がない活動ばかりでは、参画は望めませんから。前回お話しした社会教育士を目指す皆さんとの交流もそうでしたが、新しい視点に気づき学ぶことができる場をこれからも継続していきたいと思っています。

安藤正知(あんど まさとむ)

認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房 理事長

秋田市出身。化学品会社に16年勤務後退職し、2003年より宇都宮市民活動サポートセンター勤務、2005年NPO法人宇都宮まちづくり市民工房設立に関わり、2019年理事長就任、市民主体のまちづくりを目指して調査研究、まちづくりの実践を行っている。2012年1月宇都宮市が開設した宇都宮市まちづくりセンターの指定管理者としてその管理運営に携わる。

栃木県コミュニティ協会地域研修会 (生活学校フォーラム)



国連「持続可能な開発のための2030年目標」
17目標と169ターゲット

国連広報センターHPより

研修を通して、プラスチックごみに関する正しい知識を身につけ、海洋汚染が生じている現状や対策について、理解を深めることができました。

国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）の17の国際目標の14番目に「海の豊かさを守ろう」があり、世界的にごみの削減対策が求められています。

この研修会は、栃木県生活学校連絡協議会との共催で、「プラスチックごみと海洋汚染」をテーマに講演を行いました。

12月13日（水）に、とちぎボランティアNPOセンター（ぽ・ぼ・ら）において、栃木県コミュニティ協会地域研修会（生活学校フォーラム）を開催しました。

「プラスチックごみと海洋汚染について」

講師：高田 秀重 教授（東京農工大学 農学部 環境資源科学科）



人間が捨てたプラスチックごみがマイクロプラスチックと化し、どのように人間の身体に被害を及ぼすのか。海洋汚染を研究されている高田教授よりお話を伺いました。内容は次のとおりで、高田教授の研究に基づき、写真やデータを交えてご説明いただきました。

- ・プラスチックごみとマイクロプラスチック
 - ・海洋生物によるプラスチックの摂食・取込
 - ・プラスチックに含まれる有害化学物質と生物・ヒトへの影響
 - ・プラスチック汚染対策：持続可能社会に向けて
 - ・東京農工大学プラスチック削減5 R（※）キャンパスについて
- ※ 5 R（Reduce, Reuse, Recycle, Renewable, Reserch）

プラスチックごみを食べた海洋中の魚を人間が食べ、健康に害を及ぼすなどの悪循環に陥っています。これを断ち切るには、プラスチックを減らすことが必要です。

例えばペットボトルで水を飲むと水道水の22倍のマイクロプラスチックを摂取します。

プラスチック製品に含まれている添加剤の中には環境ホルモンとして働いて、生殖や成長に影響を与えるものがあります。また、プラスチックの焼却は温室効果ガスの発生となり、地球の温暖化が進みます。

私たち一人ひとりがプラスチックの使用を減らしていくことが大切で、東京農工大学では5 Rキャンパス活動を行い、プラスチックごみの削減に努めているそうです。

自分たちの生活で地産地消を実施することで、包装の削減、輸送に伴うCO₂の削減につながります。

海洋プラスチック汚染の低減のためには、使い捨てプラスチックの使用削減が重要です。

レジ袋からマイバック、ペットボトル飲料から水筒やマイボトル、ストローは断ろう、コンビニの弁当でなく家で作ったものを食べる、個包装のお菓子でなくまとめて包装してある商品を買う、化学繊維の衣服でなく天然素材の衣服を買うなど日常生活から私たちにできることがあります。

プラスチックごみの削減に努めていきたいと改めて考えさせられる講演でした。



コミュニティ通信

コロナに負けず、お祭りを開催！



◆～本郷北コミュニティ祭り～本郷北コミュニティ推進協議会（上三川町）◆
令和４年１０月３０日（日）に本郷北コミュニティセンターで開催された本郷北コミュニティ祭りへ行ってきました。

去年は規模を縮小して行ったそうですが、今年は通常通りの開催だそうです。天候にも恵まれ、老若男女多くの方々がお祭りを楽しんでおられました。

カラオケ大会や野外でのファミリーカラオケ、フリーマーケットや輪投げ、ミニ四駆の競走、めだかやなすの販売など、とても賑わっていました。実行委員会の皆さんは法被を着用され、お囃子の演奏が流れるとお祭りの気分が盛り上がりました。コミュニティでこのような規模でお祭りを開催するのはすごいと参加者からの声。地域のお祭りにお邪魔し、楽しませていただきました。おもちや焼きそば、綿あめやマフィン、ワッフルなど美味しそうな食べ物が揃い、長蛇の列ができていました。お値段もリーズナブルでみんなが楽しめるお祭りが、実行委員の皆さんのご尽力で開催されていることを実感しました。ありがとうございました。（〇）



■「コミュニティ通信」コーナーでは、各団体の活動やどのような想いで活動されているかを紹介させていただきます。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

私たちもコミュニティづくりに協力しています

『できる親切はみんなでしょう それが社会の習慣となるように』

「小さな親切」運動栃木県本部

代 表：黒本 淳之介
事務局：栃木銀行 経営企画部広報文化室
住 所：宇都宮市西２丁目１番１８号
TEL：０２８－６３３－１２４１（代）





図々しいこう



【表紙の写真】 白沢宿は江戸時代の奥州街道の第一宿として栄えた宿場町です。かつての用水路が今も宿場の中を流れる趣のある街並みです。令和2年度に市民遺産(宮遺産)に認定されました。

▼ 講師・助言者派遣 ▼

当協会では、会員及び市町等が主催するコミュニティに関する勉強会又は講演会に対して講師・助言者等を派遣することにより、コミュニティの活性化を図っております。講師派遣のお申し出をお待ちしております。協会までご連絡ください。

▼ 令和5年度 総会・コミュニティ研修会 ▼

日 時：令和5(2023)年5月22日(月)
13:30~16:20
会 場：栃木県総合文化センター 特別会議室

【研修会】

演 題：「 令和の時代の地域づくり 」

講 師：里山くらしLABO 代表 池田 水穂子氏

■ 編 集 後 記 ■

令和2(2020)年2月22日は本県内に緊張が走った日でした。県内で初めて新型コロナウイルス感染者が確認された日です。それから約3年、忘れかけていた日常にやっと戻れそうな気配を感じられるようになりました。卒業式で初めて校歌を合唱した子どもたちのニュースを見聞きすると、よく3年間子どもたちは耐え先生方も支え続けたと、心が熱くなります。

同じように、地域コミュニティのお祭りやイベントが再開したニュースを聞くと、関係者の皆様の努力に頭が下がる思いです。諸々の事情で再開できないと悩む場合もあると思いますが、そのような時には松下幸之助氏の言葉から元気をもらえます。「山は西からも東からでも登れる。自分が方向を変えれば、新しい道はいくらでも開ける。」元のやり方どおりではなくとも、新たな形でつながりを作っていけるとよいのではないのでしょうか。

最後に、コミュニティのリーダーの皆さん、コロナ禍の中で耐えて頑張ってきた自分を、地域の方々を、どうぞ思いっきり褒めてください。そして、明日のコミュニティづくりへと自信を持って歩みを進めてください。「雲の向こうは、いつも青空。」(ルイーザ・メイ・オルコット) (N)

発行：栃木県コミュニティ協会

〒320-8501

栃木県宇都宮市塙田 1-1-20

栃木県県民生活部県民文化課内

TEL 028-623-2110/FAX 028-623-2121



栃木県誕生150年
150 みんなで創る、未来のとちぎ

